

ゴメス・デ・アベリャネーダ『サブ』

——19世紀キューバにおける二重の不可能な愛

花方寿行

19世紀当時未だスペイン領であった生まれ故郷キューバで文学活動を始め、スペインに移住後華々しい成功を収めた女性作家ヘルトゥルディス・ゴメス・デ・アベリャネーダ(1814-73)の最初の長編小説『サブ Sab』は、1841年の刊行以来、彼女の作品中でも極めて特異な評価の振幅を経験してきた。奴隷制度の未だ残る同時代キューバを舞台に、黒人奴隷サブの女主人カルロータに捧げる報われぬ愛を描いたこの作品は、最初に出版されたスペインでは好評を博し、アベリャネーダの文名を高めたものの、故郷キューバでは風俗を乱すとして出版禁止となったうえ、晩年保守化を強めたアベリャネーダ自身が自選『全集』に本作を収録しなかったほど、問題作と見なされてもいた。スペインでの好評は、マージナルな境遇に置かれた高潔なヒーローの不可能な愛を扱ったロマン主義小説としての完成度により、キューバでの取り締まりはその反奴隷制的なメッセージがもたらす影響を恐れてのものだった。

一方現代では反対に、ロマン主義小説としての作りが古臭くとられるようになるかわりに、本作はまず時代に先駆けた反奴隷制小説として評価され、ついで黒人奴隷と女性を結びつけ、共に白人＝男性の支配に苦しむ存在として描いたフェミニズム文学の古典として、批評家の注目を集めるようになっていく。

本論文では、現代の批評の動向を踏まえながらも、軽視されることの多い恋敵エンリケとの関係に注目しつつ、『サブ』を19世紀半ばにキューバが置かれていた国際関係を表象するナショナル・ロマンスとして読み解いていく。

1

『サブ』の粗筋は比較的要約しやすい。舞台は19世紀初頭のキューバ、アベリャネーダの出身地プエルト・プリンシペ(現在のカマグエイ)近郊の大農園。主人公サブはここで監督として働く黒人奴隷で、幼い頃親しく育てられた主人の娘カルロータに想いを寄せている。しかしそこにプエルト・プリンシペでも有数のイギリス人貿易商ホルヘ(ジョージ)・オトウェイの息子エンリケ(ヘンリー)が、カルロータの求婚者として現れる。だがお互い愛し合っているのは事実であっても、ひたすらロマンティックな恋愛に憧れるカルロータと打算的な面を持つエンリケの間には根本的な気質のずれがあり、それに気づいたサブは二人の将来に懐疑的になる。実際様々な事情からカルロータの持参金が予想していた額には程遠くなることを知ったホルヘは掌を返すかのように結婚に反対、父の言うなりのエンリケも婚約解消を宣言し、農園を立ち去る。しかし絶望にうち拉がれるカルロータを見るに見かねたサブは、本来自分の自由を買い取る資金にするつもりだった当たり籤を持ってエンリケを追い、これを持参金に充てることで二人の結婚をとりまとめる。歓喜するカルロータの一方で、無理が祟ったサブは病に倒れ落命する。そして数年後、夫と共に

慣れぬイギリスで暮らし、物質的には恵まれていても精神的には虚しさを覚えて過ごしているカルロータは、今は修道院で暮らす幼馴染みテレサを看取るために戻ったキューバで、彼女からサブが内面を吐露した手紙を渡され、失ったものの大きさに気づかされる。

本書の批評において一貫して重視されてきたのは、主人公サブが黒人奴隷であるにもかかわらず、白人の恋敵エンリケより高潔で優れた人物として設定されていること、そしてにもかかわらず社会的な差別構造により恋を諦めざるを得ないという展開である。サブは何度か自分の不幸の原因を奴隷制に帰し、それがいかに不当でかつ人為的な障害であるかを批判する¹が、こうしたくだりに本作の反奴隷制小説としての特徴を見出し評価する批評は、早い時期から存在していた。そもそもキューバでの出版差し止めという事態からして、奴隷制批判が本作の主たるテーマだと見なされなければ、生じなかったことだろう²。『サブ』を反奴隷制小説として評価する近年の風潮には、それによって本書をハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』（1852）に先立つ世界初の反奴隷制小説と位置付けようという、スペイン語圏の批評家たちの自言語彙が寄与していることも確かである。

はたして『サブ』が本当に奴隷制度を批判しているかについては後に詳しく論ずるが、奴隷制度批判を文学作品によって行う試みは、他の同世代キューバ作家によっても為されていた。1830年代後半から自由主義者ドミンゴ・デル・モンテの周辺に集まっていたキューバ作家たちは、自然主義リアリズムの影響下にキューバ独自の社会問題を作品のテーマとして扱うことを目指し、反奴隷制小説の執筆に取り組んでいた。しかしこうした運動はキューバにおけるスペイン支配を揺るがすものと見なされ、1844年に「ラ・エスカレーラの陰謀」事件をきっかけとして、奴隷だけでなく自由黒人やムラート（白黒混血）、さらには自由主義知識人までが厳しく弾圧されるようになる。デル・モンテ傘下の作家たちもまた投獄を始めとする圧力を受け、亡命や沈黙の道を選ばざるを得なくなった。執筆年代は早くとも、彼らの作品のほとんどが情勢が変化した1870年代以降になって初めて日の目を見たので、『サブ』がいち早く出版されたことにはかわりはない。『サブ』を論じる上で重要なのは、奴隷制批判というテーマが「キューバ文学」を形成する上で重要なナショナルな要素として同時代的に作家たちの間で意識されるようになっていたことと、その一方で社会改革計画の一環として反奴隷制を標榜するデル・モンテのグループにアベリャネーダは加わっていなかったこと、そして『サブ』の出版がこうした活動が反スペイン的であ

¹ Gómez de Avellaneda, *Sab*. Edición de José Severa, Madrid: Editorial Cátedra, 1997, p. 106, pp. 218-220 など参照。なお本論文では煩瑣を避けるため、以後 *Sab* からの引用は全てこの本からのものとし、丸括弧内に頁数のみを記すこととする。

² スペインでの出版状況については、1841年に少数が刊行されたものの、公的な禁止によってではなく、スキャンダルを恐れたアベリャネーダの親戚によってほとんどが回収され、あまり出回らなかったというものと、あらゆる本屋で見かけるほどで回っていたというものと、相反する異説が存在する。一方『サブ』と自由恋愛を扱った『二人の女』（こちらも自選『全集』から削除されることになる）が、1844年にキューバ税関で持ち込みを禁止されたことについては、確かに記録がある。Severa, "Introducción", Gómez de Avellaneda, *Sab*. Madrid: Editorial Cátedra, 1997, pp. 47-48. 参照。なお『サブ』がキューバ国内で刊行されるのは、アベリャネーダの死後の1883年になってからである。

るとして弾圧される以前のものであったことの、3点である¹。

一方近年の批評は、女性と黒人奴隷を白人＝男性中心主義社会の犠牲者として結びつけたサブの手紙に注目する。

¡Oh!, ¡las mujeres! ¡Pobres y ciegas víctimas! Como los esclavos, ellas arrastran pacientemente su cadena y bajan la cabeza bajo el yugo de las leyes humanas. Sin otra guía que su corazón ignorante y crédulo eligen un dueño para toda la vida. (270-271)

おお、女たちよ！ 哀れな盲目の犠牲者たちよ！ 奴隷のように、彼女たちは辛抱強く鎖を引きずり、人間の作った法のくびきのもとに頭を下げる。無知で信じやすい心の他に導き手もないまま、生涯の主人を選ぶのだ。

多くの批評家がこの言葉を鍵に、アベリャネーダの他の作品や書簡も視野に収め、フェミニズム的な問題意識に基づいて作品を論じている。こうした批評には、アベリャネーダがフェミニズム的な男性中心主義批判と奴隷制批判を同等な力を込めて行っているとするピコン・ガーフィールドや、奴隷制批判におけるアベリャネーダの限界を指摘し、それがフェミニズム的な問題意識における限界ともつながっていることを指摘するトーレス・ポウなどが含まれる²。

しかし『サブ』を反奴隷制小説として論ずる批評においても、フェミニズム小説として扱うものにおいても、恋敵エンリケについては白人男性であることばかりが強調されており、彼がカルロータと同じキューバのクリオーリョ（スペイン系白人）男性ではなく、イギリス人として設定されていることの意味については、あまり意識されていない。この点に注目しているのは、19世紀ラテンアメリカ文学における異人種・異階層間恋愛を扱った小説を、ナショナル・アイデンティティを形成する装置として論じたドリス・ゾマーである。しかしゾマーは逆に登場人物のナショナリティにのみ注目し、本論文で後に詳しく論ずる奴隷制をめぐる『サブ』の複雑なスタンスを単純化したために、限界を抱えることに

¹ デル・モンテのグループの活動については、Rivas, *Literatura y esclavitud en la novela cubana del siglo XIX*. Sevilla: Escuela de Estudios Hispano-americanos, 1990. 参照。

² Picon Garfield, *Poder y sexualidad*. Amsterdam-Atlanta: Editions Rodopi, 1993., Torres-Pou, *El e[x]terno femenino*. Barcelona: PPU, 1998. 参照。なお19世紀スペインにおいて、このようなフェミニズム的な問題意識は、アベリャネーダだけではなく、カロリーナ・コロナード、ビセンテ・ガルシア・ミランダ、ロサリーア・デ・カストロらによって共有されており、彼女たちもまた女性と奴隷を結びつける作品を発表していた。Martínez Torrón ed., *Poetas románticas españolas (Antología)*. Madrid: Sial Ediciones, 2008, p. 89, p. 133., Picon Garfield, *op.cit.*, p. 52. 参照。

なおコロラードやコンセプション・アレナルは、フェミニズム的活動を行うと共に、マドリッドの奴隷制廃止協会にも参加しており、コロラードはキューバの奴隷制を批判する詩を1868年に発表している。Martínez Torrón, *op. cit.*, p. 91. 参照。一方アベリャネーダは、「自伝」として知られるものも含んだ膨大な書簡において、筆者の見た限り支持・反対を問わず一切奴隷制について言及しておらず、反奴隷制活動に加わった形跡もない。Gómez de Avellaneda, *Poesías y epistolario de amor y de amistad*. Madrid: Editorial Castalia, 1989., *Tu amante ultrajada no puede ser tu amiga*. Madrid: Editorial Fundamentos, 2004. Figarola-Caneda, *Gertrudis Gómez de Avellaneda*. Madrid: Sociedad General Española de Librería, 1929. 参照。

なっている。

それではゾマーの論を参照しつつ、ナショナル・ロマンスとしてみた場合に『サブ』の各登場人物がいかなる政治集団を象徴しているかを確認しながら、これと奴隷制との関係を論じていこう。

2

『サブ』において恋愛関係の輪を形成するのは、既に粗筋で言及したサブ、カルロータ、エンリケに加え、カルロータの家で育てられた遠縁の孤児テレサの4人である。このうちサブ以外の3人については、帰属する社会・民族集団を特定するのは簡単である。カルロータは「ドン」の敬称を付けて呼ばれる農園主の娘であることから、キューバ生まれのスペイン系住民クリオーリョであり、かつ19世紀に力を持っていた、奴隷制農業に経済基盤を置く伝統的上流階級に属している。カルロータの遠縁に当たるテレサもまたクリオーリョであり、実父の放蕩により零落し、ドン・カルロスの庇護下で肩身の狭い暮らしをしているとはいえ、労働者階級ではない。

エンリケについては、既に粗筋紹介に合わせて簡単に出自に触れたが、その経歴が述べられる第3章冒頭は、ナショナル・ロマンスにおける彼の位置付けをいかにも分かりやすく示している。第2章においてカルロータとテレサが紹介され、前者がいかにロマンティックな純情でエンリケを理想化しているかを述べた後、この章の最後の段落は「エンリケ・オトウェイはかくも美しい情熱に値したのだろうか？ ¿Merecía Enrique Otway una pasión tan hermosa?」と疑問を投げかけて始まり、期待を持たせた上で紹介を次章に託す(118)。しかし第3章最初の段落で述べられるのは、カルロータとエンリケの個人的な関係ではなく、同時代キューバとヨーロッパの経済関係である。

Sabido es que las riquezas de Cuba atraen en todo tiempo innumerables extranjeros, que con mediana industria y actividad no tardan en enriquecerse de una manera asombrosa para los indolentes isleños, que satisfechos con la fertilidad de su suelo, y con la facilidad con que se vive en un país de abundancia, se adormecen, por decirlo así, bajo un sol de fuego, y abandonan a la codicia y actividad de los europeos todos los ramos de agricultura, comercio e industria, con los cuales se levantan en corto número de años innumerables familias. (p. 119)

周知のとおり、キューバの豊かさはいつでも数え切れない外国人を引き寄せており、彼らはそこそこの手際の良さと活動で、怠惰な島民たちにとっては驚くばかりの速さで富を築き上げていった。島民たちはといえば、彼らの土地の肥沃さと、豊饒の国での生活の簡便さに満足して、言うなれば炎のような太陽の下惰眠を貪り、ヨーロッパ人の貪欲さと活動に農業と商業、工業のあらゆる分野を任せてしまい、僅かな年数の間に無数の外国人家族がそれらを我がものにしてしまったのである。

続いてエンリケの父ホルへの経歴が語られるが、一見奇妙に思われる要素も含まれている。彼はイギリス人で、一代で財を築いた成り上がり者だが、そのキャリアの出発点とさ

れているのはイギリスではなく、アメリカ合衆国北部である。彼はそこで安物雑貨の行商を始め、ハバナに移住、さらにプエルト・プリンシペに移って衣料用布地の輸入販売で財を成すに至る。しかしビジネス上の失敗から負債を抱え、それを補うために持参金目当てで息子エンリケとカルロータの結婚を画策する。エンリケは父の貧しかった頃から共に暮らしているという意味ではやはり成り上がりであり、豊かになって後ロンドンに送られて洗練された作法を身につけているが、父の言いなりになる気の弱さと、父親譲りの計算高さを共に備えている。この二つにカルロータの女性としての魅力が加わり、エンリケは彼女の誘惑に積極的に乗り出す。

エンリケの接近により、ロマンティックな恋愛に憧れる年頃のカルロータは、エンリケ個人を理解した上ではなく、彼に理想の恋人像を投影して、恋におちる。しかしこの二人の結婚に対しては、ドン・カルロスの親族も含むプエルト・プリンシペ中の人々が反対する。その理由の正当性についての記述は、両義的だ。カトリックの強いキューバにおいては、プロテスタントのイギリス人を異端と見なす宗教的な反発が強く、それ故「雑貨行商人への軽蔑より異端者への恐怖に触発されて *menos inspirados por el desprecio al buhonero que por el horror al hereje*」(123) 人々は結婚に反対したとされる。ここでは「異端者への恐怖 *el horror al hereje*」などという迷信的な発想をする親族や地元住民が批判される一方で、既に輸入販売業者として大きな店を構えているホルヘを繰り返し軽蔑的に「雑貨行商人 *el buhonero*」と呼ぶことで、彼が成り上がり者であることこそが問題とされている。

この階級差別意識は、両家の父が直面する経済危機の描き方にもみられる。ドン・カルロスは最終的にエンリケとカルロータの結婚を支持したため、親戚からカルロータへの遺産贈与を取り消され、加えて親族との係争に敗れ、少なからぬ土地を奪われる。上告するよう勧める声に従わずこの判決を呑んだドン・カルロスは、確かに批判的に描かれる。

Don Carlos era uno de aquellos hombres apacibles y perezosos que no saben hacer mal, ni tomarse grandes fatigas para ejecutar el bien. Había seguido los consejos de su familia al oponerse a la unión de Carlota con Enrique, pues él por su parte era indiferente, en cierto modo, a las preocupaciones del nacimiento, y acostumbrado a los goces de la abundancia, sin conocer su precio, tampoco tenía ambición ni de poder ni de riquezas. Jamás había ambicionado para su hija un marido de alta posición social o de inmensos caudales: limitábase a desearle uno que la hiciese feliz, y no se ocupó mucho, sin embargo, en estudiar a Enrique para conocer si era capaz de lograrlo. (123)

ドン・カルロスは悪を為すこともできなければ、善を実行するために大きな苦勞を引き受けることもできない、あの温厚で怠惰な男たちの一人だった。カルロータのエンリケとの結婚に反対した時には一族の助言に従ったのだが、それというのも彼自身としては、ある意味、生まれの問題については無関心だったからであり、その代価も知らぬまま豊饒の快樂に慣れきっていたため、権力への野心も富へのそれも持ち合わせていなかったからだ。娘のために高い社会的地位や、莫大な財産を持つ夫を得たいという野心を持ったことは決してなかった。ただ彼女を幸せにしてくれるような相手を望んでいただけだったが、にもかかわらずそうすることができる能力があるかどうかを知るためにエンリケを研究す

るのにも、さして腐心しなかった。

このドン・カルロスへの批判が、先に引用した第3章冒頭でのキューバ人批判と一致していることを、見逃してはならない。土地の豊かさに甘んじて、それを外国勢力から守る努力を怠ったクリオーリオの伝統的キューバ支配層を、ドン・カルロスは象徴しているのだ。だが批判はされても、ドン・カルロスは否定はされない。彼の「善良さ」、娘への愛情は、あくまでも真なるものとして肯定されている。実質的には彼もカルロータも、この経済的苦境を切り抜けるための何の対策も思いつかず、取ろうと努力もしないにもかかわらず。

一方同じく経済的な苦境に陥った時のホルヘ・オトウェイの記述は、辛辣を極めている。リスクな商取引に手を出して打撃を受け、信用を維持するため高利で大金を借入れ、さらに苦境に立たされたホルヘについて、地の文で「かつて *usurero* であった者が、自身が他人の高利(*usura*)の犠牲者となって自分自身を罰することを強いられたのであった。El que antes fue usurero, vióse compelido a castigarse a sí mismo siendo a su vez víctima de la usura de otros.」(120)との批判が為される。スペイン語の単語"*usurero*"は、職業としては「高利貸し」を意味するが、「法外な利益を得る者」「暴利を貪る者」の意味もある。ホルヘが金貸しをしていたという記述はここまでないので、彼を指しては後者の意味で用いられているとみていいだろう。ここで重要なのは、ホルヘが同業者の中でも特別あこぎな商売をしてのし上がってきたという記述がないことだ。直接何かを生産するのではなく、生産物の流通を媒介することによって利益を得る貿易商の活動それ自体が、いかがわしいものとして捉えられているのである。

父親の欲得絡みの要請を受け、カルロータとの結婚を決めるエンリケについても、同様の批判が為されている。

Dotado el joven de un carácter flexible, y acostumbrado a ceder siempre ante la enérgica voluntad de su padre, prestóse fácilmente a sus deseos, y no con repugnancia esta vez, pues, además de los atractivos personales de Carlota, no era Enrique indiferente a las riquezas, y estaba demasiado adoctrinado en el espíritu mercantil y especulador de su padre. (121)

青年は生まれつき柔軟な性格で、父親のエネルギッシュな意志の前にいつも譲歩することに慣れていたので、彼の望みに容易く応じたが、今回は嫌々ながらではなかった。というのも、カルロータの個人的な魅力に加えて、エンリケは富に対して無関心ではなかったし、父親の商業的で投機的な精神にあまりにも感化されていたからである。

富に関心を抱き、「商業的で投機的な精神」を持つことは、それ自体唾棄すべきことなのだ。そしてその対極にあるのが、奴隷制度によって支えられた農業生産によって生まれながらに裕福な暮らしをしながら、富の維持には無関心にして無能なドン・カルロスであり、にもかかわらず彼はまさにそれ故に擁護に値するのである。

それでは主人公であるサブは、どのような存在として設定されているのだろうか。既に述べたように、設定上黒人奴隷であるサブだが、その登場シーンにおける容姿の描写は、

彼をこの社会・人種集団の典型としては提示しない。

Era el recién llegado un joven de alta estatura y regulares proporciones, pero de una fisonomía particular. No parecía un criollo blanco, tampoco era negro ni podía creérsele descendiente de los primeros habitantes de las Antillas. Su rostro presentaba un compuesto singular en que se descubría el cruzamiento de dos razas diversas, y en que se amalgamaban, por decirlo así, los rasgos de la casta africana con los de la europea, sin ser no obstante un mulato perfecto. (104)

到着したばかりの男は背が高く均整の取れた体つきの青年だったが、独特の顔立ちをしていた。白人のクリオーリョには見えなかったし、黒人でもなければ、アンティール諸島の最初の住民の子孫とも思われなかった。その顔は二つの異なる人種の混交が見て取れる独特の構成を示しており、そこでは、言うなれば、アフリカ系の特徴がヨーロッパ系のものと混じり合っていたが、にもかかわらず完全なムラートにはなっていなかった。

サブはクリオーリョにも、黒人にも、先住民にも見えない。彼はその全てが混ざった独特の風貌をしているのだが、奇妙なのは最後の一文である。アフリカ系とヨーロッパ系が混じっているのが確かでありながら、「完全なムラート」ではないとはどういう意味だろうか。そもそも「完全なムラート」とはいかなる存在なのだろうか？

この表現の奇妙さを理解するためには、19世紀当時のキューバでは、クリオーリョと黒人の混血が非常に多くみられたことに加えて、彼らがそれぞれの血がどの程度の割合で混ざっているかに基づいて、極めて細かく分類されていたことを知らなければならない。それは「純粋な」クリオーリョと「純粋な」黒人を両極にしなから、少しでも白人に近い混血が社会的に優れているとされる、高度に分節化された人種差別社会であった¹。その厳密さからすれば、「完全なムラート」が指しうるのは一対一割合での白黒混血だろうが、「そうではない」と断ることで指し示される混血の割合は、幅が広すぎて定義として意味を成さない。ここでも重要なのは、「～ではない」という否定なのだ。

サブの人種的特徴についての二重の否定は、サブがそこで挙げられるもの以外の何者かであることを意味しているのではない。混血児がその度合いに応じて細かく分類される社会にあって、いかなる分類項にも収められることのない、観念的な理想状態としての混血そのものを意味しているのだ。

サブの出自については、この後母はアフリカでは王女であったが人身売買でキューバに奴隷として売られてきたこと、父が誰かは分からないことが述べられる。ドン・カルロスの末弟ルイスが死の直前カルロスに何かを伝え、その後サブが特別厚遇されるようになったという説明と、サブの容貌に白人を思わせる要素が混じっていることから、サブが実はルイスの私生児であり、カルロータの従兄である可能性が示唆される。しかしこの設定からは、サブが「完全なムラート」ではなく（完全なアフリカ系の母と、完全なクリオーリョのルイスの間に生まれた子なら、一対一混血のはずである）、さらには先住民を思わせ

¹ Rivas, *op. cit.*, pp. 77-78. 参照。

る要素まで備えていること¹は、説明がつかない。後にサブの養母として先住民女性マルティナが登場するが、彼女が表象するのはサブの遺伝的混血性ではなく、文化的混血性である。なお、サブがカルロータの従兄かもしれないという設定は、この後物語上全く言及されることがない。ドン・カルロスがサブを人夫頭として厚遇するといっても、奴隷身分から解放することはない。カルロータがサブの出自を知ることもないし、サブ自身が自分が嫡出子であれば得ていたはずの権利に言及することもない。ここでも重要なのは、サブの文化的混血性であり、彼が貴種であることの確認である。

さて、このようにサブはクリオーリョ、黒人、先住民の文化的混血の象徴として登場するのだが、だとすれば同時に彼を黒人奴隷という社会集団を象徴する人物と解釈することは可能なのだろうか？ 確かにサブは繰り返し、一般論として、奴隷の置かれた過酷な状況に言及する(106, 269-270)。しかし彼は自分が他の奴隷とは異なり、過酷な労働や体罰とは無縁の待遇を受けていることを認めており(109)、作中他の奴隷やムラートと共に現れ、彼らの代弁者として振る舞うこともない。そもそも奴隷制農場を舞台とするこの小説において、黒人の血が混じった人物は、サブ以外一人として登場しないのだ。サブは社会集団としての黒人奴隷を代表して行動することはない。彼はそもそも貴種(王女と白人農園主の間の子)でありながら、運命の皮肉によってマージナルな境遇に置かれた、ロマン主義文学好みのバイロンの主人公なのだ。『海賊』の主人公が社会集団としての海賊の代表ではないように、サブもまた社会集団としての黒人・奴隷を代表しているのではない。

そしてサブは何よりも、カルロータに身も心も捧げる、比喩的な意味での愛の奴隷である。彼がカルロータへの愛ゆえに奴隷の身分を引き受け、解放を望まないと言明する場面は、作中2カ所ある。登場したての第1章では、ドン・カルロスとルイスがサブを高く評価しているのなら、なぜ奴隷身分から解放しなかったかのエンリケの問いに、サブはこう答える。

Desde mi infancia fui escriturado a la señorita Carlota: soy esclavo suyo, y quiero vivir y morir en su servicio.(111)

幼少期から私はカルロータお嬢様のものと公的な文書で決められています。私はあの方の奴隷であり、あの方にお仕えしながら生きそして死ぬことを望んでいるのです。

この言葉の前半は、サブを解放しないのはドン・カルロスらには権利がないからとの法的な説明だが、もちろん文字通りに取るならカルロータが解放しないことの責任を負うべきであろう。しかし重点は後半にこそある。ここでは奴隷身分に留まるか否かの決定権がサブの側にあるかのように述べられており、それによって現実の奴隷制から離れ、恋愛関

¹ 本文中で引用した104ページの記述では、先住民の子孫には「見えない」と否定されているが、これはクリオーリョや黒人、「完全なムラート」には「見えない」とされているのと同じく、分類を避けながら要素が混じっていることを示す表現と見なすべきである。ちなみにそのすぐ後の段落ではサブの容貌について、肌の色は「ある種暗色の背景を持つ黄色がかった白 un blanco amarillento con cierto fondo oscuro」(104)という、色彩としては理解不能な説明がされ、白人黒人それぞれの特徴を表す細部に混じって、黄色人種の特徴としてよく用いられる「切れ長の(中略)黒い目 los ojos negros (...) rasgados」(104)も備えているとされている。

係における献身の象徴としての奴隷に話をすり替えている。前半はサブが仕える相手が農園主一族ではなく、カルロータ個人であることを示すためにのみ導入されているのだ。

もう1カ所は終盤、サブとテレサの会話においてである。ここでは社会の不正義と、奴隷が平等な権利を求めて革命を起こす可能性に言及しながら、サブは自分がそのような行動を取ることはないという(206-7)。ここでもサブは、自分が奴隷身分から解放されること、さらには黒人にとってより望ましい社会条件の獲得よりも、自分がカルロータの傍に留まることを優先させている。

そしてテレサに残した手紙の中で、サブは黒人差別を厳しく批判するが、それに続けて結婚によって男性の支配下に置かれる女性の立場を、奴隷よりも悲惨なものとして告発する(269-271)。既に述べたように、このくだりは『サブ』の中で現在最も注目されており、男性による女性支配を白人による異人種支配と連動するものとして論じたという意味で、フェミニズム的観点からみて画期的だったことは間違いない。しかしトレス・ポウが指摘するように、当時奴隷労働を強制され、過酷な体罰を科せられることもあった黒人男性(奴隷の中には女性も含まれていることは言うに及ばず)より、いくら権利を制限されていようと、上流階級の女性の方がより悲惨な状況にあるというのは、誇張のし過ぎであろう¹。ここではサブは、黒人奴隷の代弁者ではなく、(白人)女性の代弁者として振る舞っているのだ。

さて、以上述べてきたように、サブは黒人奴隷を代表する人物としてよりも、キューバの文化的混血性を象徴する人物として描かれている。黒人奴隷という出自は、一方的に身分が上の女性に愛情を捧げる宮廷恋愛的なプラトニック・ラブを正当化するため²と、女性差別の批判において活用されるが、力点が常にこちらに置かれているために、サブが黒人奴隷を代表する存在として発言をしているという印象は、ほとんど残らない。本論文ではそのような描き方に対する評価は問題とせず、サブが黒人奴隷ではなく混血文化としてのキューバを象徴しているということを確認して、先に進みたい。

3

『サブ』においてカルロータは、一貫して理想の結婚相手として描かれる。一方人間としては肯定的に描かれているが、財産を持たず日陰の身であるテレサは結婚相手としては不適合とされ、最終的には修道院に入る。この二人は共にキューバのクリオーリョを代表し、カルロータはさらにキューバの自然の持つ資源としての豊かさを象徴している。男性登場人物の中では、キューバの文化的混血性を象徴するサブが、不当な差別に苦しむ高貴な人格者として描かれ、理想の男性として提示される一方、イギリス人であるエンリケは打算的で怯懦な俗物として、一貫して否定的に描かれている。この設定をみる限り、ゾマーが指摘するように、『サブ』においては「正当な」キューバ人登場人物と、「非正当な」外国

¹ Torres-Pou, *op. cit.*, p. 102. 参照。なおトレス・ポウは、社会制度を批判しながらも大きな改革には消極的なアベリャネーダのスタンスが、奴隷制批判のみならずフェミニズム的な問題意識においても限界となっていることを指摘している。*Ibid.*, p. 110. 参照。

² サブはカルロータが読み聞かせる身分差のある恋愛小説に感情移入する(267)。

人求愛者は明確に区別され、後者は排除されている¹。理想とされるカルロータとサブのカップリングこそが、外国勢力を排除したキューバ・ナショナリズムの成立のために望ましいことなのだ。

しかしなぜかゾマーは論じずに先に進んでしまうのだが、ナショナル・ロマンスとして見た場合、『サブ』では奇妙なことが起きている。それを理解するには、登場人物の設定と地の文を通して読者に示される価値評価だけでなく、登場人物間で持たれる恋愛感情にも注目しなければならない。

奇妙なことに、作中カルロータはサブを異性としては全く意識していない。ラスト、サブが残した手紙でその心中を知ったカルロータは彼の墓所を訪ねるが、これをもって愛情の芽生えと取るのは無理であろう。『シラノ・ド・ベルジュラック』とは異なり、カルロータはサブの行動や感情をエンリケのものと誤解して後者を愛し始めたのではなく、一貫してエンリケを愛しているのだ。結婚生活に対する幻滅は、あくまで二人の夫婦関係から生じたものである。一方エンリケは、父に命じられれば婚約を解消しようとするような弱さを持っているものの、その前後においてもカルロータが好きであるという気持ちに変わりはない。つまりカルロータ＝エンリケが一応相思相愛であり続けるのに対し、サブのカルロータへの愛はあくまで片想いに過ぎないのだ。

この三角関係にテレサを加えると、事態は一見より複雑になる。テレサもまたエンリケに恋心を抱くが、カルロータと自分の格差を意識し、気持ちを押し隠している。そんな彼女がサブのカルロータへの愛情を知った後、自分を愛してくれる女性などいないというサブの言葉に対して、次のように叫ぶ。

¡Yo! (...), yo soy esa mujer que me confío a ti: ambos somos huérfanos y desgraciados... aislados estamos los dos sobre la tierra y necesitamos compasión, amor y felicidad. Déjame, pues, seguirte a remotos climas, al seno de los desiertos... ¡Yo seré tu amiga, tu compañera, tu hermana! (220)

わたしが！（中略）わたしがあなたに自分を託すその女性です。二人とも孤児で不幸です…この地上で二人は孤立して、同情と愛と、幸福を必要としています。ですから、遠い地方に、荒野のただなかへとあなたについて行かせてください…わたしがあなたの友に、同伴者に、姉妹になりましょう！

セルベラをはじめとする幾人かの批評家は、この言葉を当時としては過激なまでに大胆な、白人女性による黒人男性への愛の告白と解釈している²。だがそうだろうか？ ここでテレサが述べているのは、テレサとサブの立場の類似であり、同病相憐れむ体の自己憐憫

¹ Sommer, *Foundational Fictions*. Berkeley-Los Angeles-London: University of California Press, 1991, p.133. 参照。

² Avellaneda, *Sab*. 注 136 (pp. 220-221) 参照。セルベラは引用の最後の言葉が、アベリャネーダが恋人セペーダに送った書簡の言葉「もうわたしをあなたの友にして恋人にしてください」に似ていると指摘するが、そこでははっきり「恋人 *amante*」という言葉が用いられている。セルベラと同じくテレサがサブを異性として愛していると解釈する批評には、他に Picon Garfield, *op. cit.*, pp. 71-72. がある。

であって、決してサブへの愛情ではない。そして最後の言葉も、サブの「妻」や「恋人」になるという申し出ではなく、あくまでも「友」「同伴者」「姉妹」になるというものである。テレサのサブへの共感は何よりも二人が共に高潔な心を持ちながら、社会的身分の低さゆえに愛情を表に出すことができないところから生まれているのであり、そこではサブのカルロータへの気持ちと彼女自身のエンリケへの気持ちが、同じ種類のものとして意識されている。だからこそ続く会話の中で、サブはテレサの思いやりに感謝をしながら、なおもカルロータへの報われぬ愛情について語り続けるが、これはテレサの求愛の言葉を無視した無神経な行為ではなく、彼女のエンリケへの想いの断ち切れなさを代弁するものともなっているのだ¹。

これら4人の恋愛感情を整理すると、次のようになる。エンリケとカルロータは相思相愛の関係にあり、ただカルロータのエンリケへの愛情がより情熱的であるのに対し、エンリケのカルロータへの愛情はより淡泊である。一方サブとテレサはそれぞれカルロータとエンリケに対して、一方的な恋愛感情を抱いている。相思相愛の二人が富裕層に属するのに対し、一方的な恋愛感情は、社会的にマージナルな存在から富裕層の異性に対して抱かれている。そして最終的には、一方的な感情は全く報われぬまま終わり、相思相愛の二人の結婚が、問題を含むとはいえ一応成立した状態で幕を閉じる。キューバ人登場人物が肯定的に、イギリス人が否定的に描かれるのは一貫しているが、最終的に曲がりなりにも成立しているのは、イギリス人男性＝キューバ人（クリオーリョ）女性のカップルのみである。しかもクリオーリョ女性2人は、共に一貫してイギリス人男性を愛しているのだ。

ナショナル・ロマンスとしてみた場合の『サブ』の奇妙さを理解するために、似たような構造を持つメキシコの作家イグナシオ・M・アルタミラーノの中編小説『エル・サルコ El Zarco』(1888)と比較してみよう。メキシコ独立後の内戦期を舞台にしたこの作品では、『サブ』によく似た関係にある4人の男女が登場する。ロマン主義文学に登場するアウトローのイメージを利用する女誑しの盗賊エル・サルコに、クリオーリョの裕福な家庭の娘でロマン主義文学かぶれのマヌエラが夢中になっており、そんなマヌエラを先住民の鍛冶屋ニコラスが慕っている。そしてニコラスに対しては、やはり先住民でマヌエラの陰に隠れた存在となっている娘ピラールが想いを寄せている。この関係は、エル・サルコがマヌエラに対しては肉欲しか抱いていないこと、またピラールがニコラスを愛していることを除けば、『サブ』におけるエンリケ＝カルロータ＝サブ＝テレサの関係に似ている。

しかし物語が展開するにつれて、エル・サルコの卑劣さが明らかになり、彼の言葉に騙されて駆け落ちをしたマヌエラが絶望の淵に追いやられる一方、ニコラスは自分のマヌエラへの気持ちが富裕層の令嬢への階級的な憧れに過ぎなかったことに気づき、ピラールの真心に触れて、彼女と結婚することを選ぶ。そして盗賊団が壊滅させられると、討伐軍によってエル・サルコは銃殺され、不幸のあまりマヌエラは発狂してしまう。ここでは最終

¹ テレサがサブを愛しているのではないかとの発言をエンリケがする時、彼はそこに一種の性倒錯を見出している。一方カルロータはそもそもテレサが愛のような情熱を抱く可能性自体を否定する。この時彼女はサブが自分を愛している可能性には気づきもしない(251)。このくだりはサブとテレサそれぞれの愛の対象であった二人が、自分たちの感情だけに囚われて相手の気持ちに全く無理解であることを示しており、テレサが本当にサブを愛していたとすると、意味を成さなくなってしまう。

的にはニコラス＝ピラールという堅実な先住民のカップルが成立し、メキシコの将来を担うべき階層として意識されている一方、エンリケに似た偽りのロマン主義的ヒーローであるエル・サルコと、彼が体現するヨーロッパ的なものに憧れ地元の文化を軽視するクリオーリョ富裕層のマヌエラのカップリングは成立しない。

もちろんナショナル・ロマンスの構造を持つ作品が、常にハッピーエンドで終わるとは限らない。例えばエクアドルの作家ファン・レオン・メラの『クマンダ』(1879)や、ウルグアイの作家ファン・ソリーリャ・デ・サン・マルティンの『タバレ』(1888)では、主人公である先住民とスペイン人の混血児(『クマンダ』では女性、『タバレ』では男性)とスペイン系の異性との恋は、先住民とスペイン人の抗争の中で、主人公の死によって悲恋に終わる。しかしこれらの作品では、カップリングの不成立が現実に残る先住民差別を隠蔽する機能を果たしているものの¹、クリオーリョと先住民の結合が理想的な国家統合をイメージするものであることには変わりがない。そしてどちらにおいても、主人公たちの恋愛が相思相愛であるからこそ、それを引き裂く抗争が否定的なものとして描かれることになる。

しかし『サブ』は、『エル・サルコ』とも、『クマンダ』や『タバレ』とも異なる。カルロータとサブのカップリングが成立しないのは、相思相愛の二人を奴隷制度が引き裂くからではなく、カルロータがサブを異性として認めていないからである。このため読者の批判は奴隷制度に集中することができず、反奴隷制小説としてこの作品を機能させないだけでなく、ナショナル・アイデンティティの基盤として白黒混血文化を賞揚することもしきらない。一方この作品においては、『エル・サルコ』と異なり、一見地味で差別される存在だが、人間としてより優れているサブとテレサのカップリングが成立することもない。そのためヨーロッパ志向の富裕層を批判し、より地に足のついた集団にキューバの未来を託すという展開にもならない。成立する、そして何より相思相愛の唯一のカップルが、エンリケ＝カルロータのものである以上、これに取って代わるべきより望ましいいかなる結合イメージも、『サブ』には存在しないのである。

『サブ』におけるカップリングの捻れは、奴隷制に対する扱いにも表れている。確かにサブとカルロータのカップリングを妨げる社会的な障壁として、サブは繰り返し奴隷制度を批判する。それでは19世紀初頭のキューバにおいて、いかなる政治勢力が奴隷制度を維持しようとし、いかなる勢力が撤廃に向けて圧力をかけていたのだろうか？ キューバに黒人奴隷を供給する奴隷貿易の禁止と密貿易の取り締まり強化に圧力をかけていたのは、外国勢力としてはイギリスであり、ヨーロッパにおける関係強化のためにそれに同調するスペイン本国政府であった。彼らの活動によって1836年から1840年までの4年間では60,834人に上った輸入奴隷数は、『サブ』出版の年である1841年から45年までの4年間では29,993人と半減し、その後も減少を続けてゆく。これに対して奴隷制度に依拠するプランテーション農業を営んできたクリオーリョの農園主たちは、スペインからキューバを離脱させ、やはり黒人奴隷制度に依拠する大農場を経済基盤としていたアメリカ南部連合に編入させることまで画策するに至っていた。このクリオーリョの企図の妨げとなった

¹ 『エル・サルコ』において先住民カップルが理想像として成立しうる背景には、作者アルタミラーノ自身が先住民系であることに加え、メキシコでは既に先住民系のベニート・フアレスが大統領になっていたという事情がある。

のは、英仏と共にキューバのスペイン帰属を前提とするカリブ海政策を推し進めていた、アメリカ北部合衆国であった¹。

したがって『サブ』が扱う時代にあつて、サブとカルロータの結びつきを可能にする奴隷解放を推し進めていたのは、作中ではエンリケとホルヘによって体现されるイギリスおよびアメリカ北部と結びついた勢力であり、逆に奴隷制度を維持する＝二人の結びつきを不可能にする方向で働いていたのが、ドン・カルロスやカルロータに体现されるクリオーリョ大農園主たちだったのだ。そしてエンリケやホルヘを敵視する本文と、サブを全く異性として意識しないカルロータ、そして奴隷であるサブに自由意志による奴隷制度の維持を認めさせることによってディスコースが正当化するの、まさしくそのようなクリオーリョの利害なのである。

もう一つ考慮すべきは、カルロータと作者アベリャネーダの共通性である。物語の終幕において、エンリケと結婚したカルロータは、イギリス（おそらくはロンドン）に住み、経済的には恵まれているが、娘時代とは打って変わった不自由な結婚生活を送っている。一方『サブ』出版に先立つ 1836 年、アベリャネーダはキューバを離れ、義父の一族の住むスペイン北西部のガリシア地方に移住するが、ここで気ままな令嬢として過ごしたキューバ時代とは打って変わって家事労働を強いられたことについて、繰り返し不満を書き綴っている²。スペイン本国は、植民地で生まれ育ったアベリャネーダにとって憧れの地でありながら、イギリスとの協調を選び奴隷制度に反対していたという点で、政治的にイギリスと通ずるものがあつた。また特に彼女に不快な思い出を残したガリシアは、気候風土の点でもイギリスに似ている。だがそれでいてアベリャネーダは、キューバのスペインからの分離や独立を支持することはなかつたし、故郷キューバを懐かしがりがらも後半生の大部分をスペイン（ただしガリシアではなく、マドリッドやセビーリャであつたが）で過ごしながら、活発な文学活動を行っている。エンリケに不満を抱きながらも、彼以外の伴侶を求められないカルロータは、スペインにおける生活やそのキューバ政策に幻滅を抱きつつも、そこから切り離された独自のアイデンティティを持つ国家としてキューバを想像できない、アベリャネーダ自身の分身でもあるのだ。

こうした背景を念頭に置いて、先の間人間関係を見直してみよう。テレサはエンリケを愛するクリオーリョ女性という意味でカルロータの、社会的身分ゆえに恋を成就させられない日陰者という意味でサブの分身である。サブはロマンティックな情熱をもって愛する主体という意味でカルロータやテレサと分身関係にあり、キューバそのものの象徴であるという意味でカルロータと一致する。そしてサブのカルロータへの愛情は、愛する主体の客体への社会的隷属を引き起こすという意味で、カルロータのエンリケへの愛情と同じである。つまりここでは『エル・サルコ』にあつたような四角関係は実際には存在せず、カルロータ＝サブ＝テレサは同じ愛する主体の言い換えに過ぎないのだ。カルロータ＝サブ関係はエンリケ＝カルロータ関係の言い換えに過ぎないからこそ、それにとって代わるべき

¹ Rivas, *op. cit.*, pp. 44-49.

² Gómez de Avellaneda, *Tu amante ultrajada...*, p. 85, Figaroa-Caneda, *op. cit.*, pp. 264-265. 参照。もちろんキューバのクリオーリョ（クリオーリョの女性形）たちが家事労働を免れていたのは、安価な労働力であるムラータ（ムラートの女性形）や黒人女性が、家事労働を引き受けていたからである。

選択肢となり得ず、理想の愛が相手への従属と直結するものとされているからこそ、サブ＝テレサの結合を理想とするような社会革命は選択肢として否定される。

ナショナル・ロマンスとしてみた場合の本作の「不備」は、アベリャネーダのスタンスからすれば不可避であったことは、ここまで来れば明らかであろう。本作にはカルロータに相応しくかつ結婚可能なクリオーリオの男性は登場しない。クリオーリオ男女の結合が、ナショナル・ロマンスにおいては独立した主体＝主権国家としてのキューバ成立を意味する以上、親スペイン派のアベリャネーダにとってカルロータの結婚相手は、「ヨーロッパ」でなければならない。しかし宗主国と植民地の関係は、19世紀欧米における夫婦関係と同じく、あるいは奴隷制度下の主人と奴隷の関係と等しく、いかにそこに「愛情」があっても、煎じ詰めれば支配と従属の関係に他ならない。それはたとえ直接的な暴力を行使せずとも、不平等な扱いを受ける側には、寒々しい幻滅と疎外感しかもたらさないものなのだ。アベリャネーダが賞揚する献身的な「愛」こそが、恋愛におけると同様社会関係においても、対等な二者間の相互信頼という「愛」に基づく人間関係を不可能たらしめている元凶なのである。

参考文献

- Gómez de Avellaneda, Gertrudis. *Poesías y epistolario de amor y de amistad*. Edición de Elena Catena. Madrid: Editorial Castalia, 1989.,
---- *Sab*. Edición de José Severa. Madrid: Editorial Cátedra, 1997.
---- *Tu amante ultrajada no puede ser tu amiga: Cartas de amor / Novela epistolar*. Edición de Emil Volek. Madrid: Editorial Fundamentos, 2004.
Figarola-Caneda, Domingo. *Gertrudis Gómez de Avellaneda*. Madrid: Sociedad General Española de Librería, 1929.
Martínez Torrón, Diego, ed., *Poetas románticas españolas(Antología)*. Madrid: Sial Ediciones, 2008.
Picon Garfield, Evelyn. *Poder y sexualidad: El discurso de Gertrudis Gómez de Avellaneda*. Amsterdam-Atlanta: Editions Rodopi, 1993.
Rivas, Mercedes. *Literatura y esclavitud en la novela cubana del siglo XIX*. Sevilla: Escuela de Estudios Hispano-Americanos, 1990.
Sommer, Doris. *Foundational Fictions: The National Romances of Latin America*. Berkeley-Los Angeles-London: University of California Press, 1991.
Torres-Pou, Joan. *El e[x]terno femenino: Aspectos de la representación de la mujer en la literatura latinoamericana del siglo XIX*. Barcelona: PPU, 1998.